

平成 21 年 5 月 16 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720134  
 研究課題名 (和文) 聴覚障害者を対象とした日本語能力テストの開発のための基礎的研究  
 研究課題名 (英文) Towards the Development of a Japanese Proficiency Test for Japanese Hearing-impaired People  
 研究代表者：佐藤 香織 (SATO KAORI)  
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・研究員  
 研究者番号：40400618

研究成果の概要：本研究は、日本語能力に問題を抱えている聴覚障害者が、自分自身の日本語能力を客観的に把握し、学習に活かすことができるような日本語能力テストを開発すること、及び体系的な日本語指導法を考案することを最終的な目標としている。そのための基礎となる研究として、特に聴覚障害者の日本語能力の実態及び誤用の背景について、文理解実験や文法テストの実施、聴覚障害者の日本語個別指導、聴覚障害者を雇用する企業等の実態調査等、様々な観点から客観的に把握することを目指した。本研究により、聴覚障害者特有の文処理のプロセス及び誤用のメカニズムの一端が明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1600,000	0	1600,000
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
総計	2400,000	90,000	2490,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：聴覚障害者、日本語能力、テスト開発、文理解、韻律構造、文法能力、誤用分析、日本語教育

## 1. 研究開始当初の背景

聴覚障害者は、その障害の程度に応じて様々な日本語習得の困難に直面している。しかし、聴覚障害者の実態に即した指導法が十分に確立したとは言えず、日本語能力が不完全な状態で社会に出ていかざるを得ない人が多いのが現状である。自分の日本語能力の不足を客観的に自覚出来ず、職場でのコミュ

ニケーションや業務に支障が出て、どのように解決していったらよいか分からずに離職に追い込まれてしまうような事例も多数報告されていた。研究開始時点では、聴覚障害者の誤用が外国人日本語学習者の誤用に類似する点のあることに注目し、外国人に対する日本語教育での知見を聴覚障害者の

日本語指導に応用しながら指導・研究を行い始めていたところであった。

## 2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、我々は、日本語能力に問題を抱えている聴覚障害者が、自分自身の日本語能力を客観的に把握し、学習に活かすことができるような日本語能力テストを開発すること、及び体系的な日本語指導法を考案することを最終的な目標としている。本研究はそのための基礎となる研究であるので、特に、聴覚障害者の日本語能力の実態及び誤用の背景について、次の3つの観点から客観的に把握することを目指した。

(1) 聴覚障害者の文法的な誤用の特質を明らかにする。

(2) 聴覚障害者が企業等で働く際、実際にどのような日本語力が必要とされているか、どのようなコミュニケーション上の困難があるのか等を明らかにする。

(3) 聴覚障害者の黙読時の文理解のプロセスに何に関わっているのかを心理言語学実験により明らかにする。

## 3. 研究の方法

調査、実験に関しては、国立大学法人筑波技術大学の聴覚障害学生、教員の理解、協力の下で行われた。

(1) 日本語に苦手意識を持ち、大学の国語の授業でも成績が極端に悪かった聴覚障害学生(3名)の個別指導を週1度(1.5~2時間程度)行い、誤用の抽出、分析、指導法の検討を行った。

(2) 日本語能力試験を何度か聴覚障害学生(50名ほど)に実施し、特に聴覚障害者が苦手だと思われる文法項目をピックアップする作業を行った。また、(1)の個別指導を通じて聴覚障害学生に共通する誤用が抽

出されたので、それらの理解や産出を更に深く問うような問題群を作成、実施した。

(3) 聴覚障害者を雇用している企業を訪問し、聴覚障害者と関わりの深い社員や人事担当者に、企業が聴覚障害者に求める日本語能力に関するインタビュー調査を行った。

(4) 日本語の関係節を含む文の理解における潜在的韻律情報の影響について、健聴者と聴覚障害者を対象とした不完全文完成課題実験を行った。

## 4. 研究成果

(1) 聴覚障害学生の文法的誤用の特質としては、複文理解の問題に起因するものが多いことが明らかになった。例えば、あるまとまった文章の中での「は」と「が」の使い分け、副詞の同節条件、使役受身文や補文をとる述語に関する問題は極端に正答率が低かった。また、産出面においても、間接疑問文に関わる誤用、「の」「こと」の使い分けに関する誤用がよく見られた。また、主述が一致せずねじれ・不整合をおこしてしまう例や、並列に並びえない要素を並列してしまう誤用も多く見られ、複文を作ること自体が不得意であることが分かった。

(2) 聴覚障害者を雇用する企業2社のインタビュー調査からは、次のことが明らかになった。

①その企業で雇用される健聴者と同等のレベルの日本語能力が、聴覚障害者にも期待されており、社内外でのメールや文書のやり取りが問題なく行えるかが重要である。日々多くのビジネス文書を理解し、処理する力と、同僚と筆談やメール等で支障なくコミュニケーションする力が必要である。

②企業が求める日本語能力は、実際の一般的な聴覚障害者の日本語能力とはかなり乖離しており、就職を希望する学生が日本語能力

の部分で落とされてしまうことも多いことが推察される。日本語能力が不足している聴覚障害者が就職し、離職しないためには、企業内外での日本語のサポート体制の一層の充実が望まれる。

(3) 日本語の関係節を含む文の理解における潜在的韻律情報の影響について、健聴者と聴覚障害者を対象とした不完全文完成課題実験を行った。

健聴者の場合は、①のような不完全文を提示すると、主語となる主節名詞句が長いと、②のような E0 (early opening) 文を作る傾向があることが分かっている。

①細川と森下が 新薬を 心から信用した友人たちに・・・

②細川と森下が[新薬を心から信用した友人たちに]会った。

もう1つの可能性として、③のような L0(last opening)文がある。

③細川と森下が新薬を[心から信用した友人たちに]渡した。

②と③の違いは、関係節が始まる位置が早いか遅いかという違いである。

結果として、健聴者と聴覚障害者の間で、文理解結果に相違が見られた。聴覚障害者の場合は、主語となる主節名詞句の長さを操作しても、教育歴（臨界期までの言語教育の状況、手話をいつ習ったか等）、障害の質（先天性か中途失聴か）や日本語の文法能力に関わらず、E0 文と L0 文の産出に有意差が見られなかった。健聴者と聴覚障害者という、音声情報の入力に大きな違いが見られる両者の間で文理解の結果に相違が見られたことは、健聴者が潜在的韻律情報を文理解に利用

しているという先行研究の結果が支持されることになる。また、興味深いことに、聴覚障害者の中で発音能力が高い者に関しては、健聴者と近い結果が出た。このことは、同じ聴覚障害者であっても発音能力が比較的高い場合には、韻律情報を使用している可能性があり、発音能力が比較的低い場合には、韻律情報を利用せずに文理解を行っているという仮説を導くものである。

この成果は海外での学会、学会誌などでも評価を受けた。今後の聴覚障害者の読解教育などにも応用が期待される重要な研究である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

Kaori SATO, Mari KOBAYASHI, Edson T. MIYAMOTO:

Lack of implicit prosody effects in deaf readers of Japanese, *Journal of Japanese Linguistics* 23, pp.35-45. (2007)

査読有り

[学会発表] (計 1 件)

Mari KOBAYASHI, Edson T. MIYAMOTO, Kaori SATO:

(Poster session) Deaf Reader's Lack of Implicit-Prosody Effects, (The 28<sup>th</sup> Annual Conference of the Cognitive Science, Vancouver, Canada, 7. 28, 2006)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 香織 (SATO KAORI)

筑波大学・大学院人文社会科学部 研究科 研究員

研究者番号: 40400618

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4)研究協力者

小林 茉莉 (KOBAYASHI MARI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・大学院生

細谷 美代子 (HOSOYA MIYOKO)

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・教授

松井 晴子 (MATSUI HARUKO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・大学院生

ミヤモト エジソン (Edson T. MIYAMOTO )

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

渡邊 まり恵 (WATANABE MARIE)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生